青山義孝先生のご退職によせて

英語英米文学科教授　大　森　義　彦

青山義孝先生は2018年３月末をもって定年退職されます。1982年（昭和57年）に講師として着任され，1985年に助教授，1992年に教授となられ，36年の長きにわたり甲南大学でお勤めいただきました。私事にわたりますが，筆者の着任が青山先生の２年後の1984年ですので，英語英米文学科の同僚としては34年間おつきあいいただいたことになります。しかし，先生とは出身大学でも先輩後輩の関係にありましたから，個人的には優に40年を超えるおつきあいで，公私ともにひとかたならずお世話になりました。

甲南に着任なさって以降，青山先生は常に英語英米文学科および大学院英語英米文学専攻を牽引する役を負ってこられました。能力と信望のある方の場合よくあることですが，先生には大学全体の運営・行政面でのお役目も回って来て，副学長，学生部長，広域副専攻センター所長，学長補佐などの要職を歴任されました。その他，数えあげればきりがないほどの「長」，「委員」，「主任」もお引き受けになり，大学，学園，学部，学科それぞれに対する貢献には大なるものがありました。あれはたしか学生部長でいらっしゃったころ（事情があって実質２期４年務められました）だったと記憶していますが，先生が岡本にアパートを借りていたことがありました。電車とバスを乗り継ぐ垂水のご自宅と大学との往復にかかる時間がもったいない，あるいは往復していたのでは終バスにも翌日の大学でのお仕事にも間に合わない，というような理由だったと思います。いかにご多忙だったかと同時に，先生がいかに責任感の強い方であるかを物語るエピソードです。先生が愚痴をこぼすのを聞いたことはありませんでした。

青山先生のご専門はアメリカ文学で，とりわけ19世紀の代表的作家ナサニエル・ホーソーン研究の第一人者でいらっしゃいます。最初のご著書『ホーソーン研究――時間と空間と終末論的想像力――』の「あとがき」で先生は，ホーソーン研究を始めたころに読んだ遠藤周作の文章に「途轍もない衝撃を受けた」とお書きになっています。それはキリスト教文化の外にいる日本人は，西洋文学作品のなかの何気ない語句に潜むキリスト教的含意を西洋人のようには「一瞬のうちに実感」できないという趣旨の文章でした。続けて先生は「当時，構造主義が流行していたこともあり，批評理論にかぶれ始めていたわたしは，読みさえおぼつかない身で理論でもあるまいというわけで，それ以来批評理論からは遠ざかり，幸か不幸かフランス型インフルエンザにはかからずにすんでいる」ともお書きになっています。これらのお言葉に先生のホーソーン研究の姿勢と方法論を垣間見ることができます。遠藤周作の文章から受けた「途轍もない衝撃」は有効な＜予防接種＞だったようで，退職を間近に控えた現在に至るまで「インフルエンザ」にかかることなく40年余りホーソーン研究に取り組んでこられました。

先生はホーソーンをオーソドックスなキリスト教徒と捉えていらっしゃいます。そして，彼の作品は小説という虚構をとおしてのキリスト教的世界観の表明であり形象化であるとして，その世界観の解明・解釈に取り組んでこられました。上にも見たように，「作者の死」なども含む輸入版批評理論の＜様々なる意匠＞に惑わされることなく，あくまで作者ホーソーンの意図を正確に忠実に読み解くことを主眼として作品と向き合ってこられました。「キリスト教的世界観」を解明する，これは言うは易いが行うは難い作業です。青山先生はキリスト者ではなく，したがって先生にとってキリスト教は全くの異文化であります。ならばホーソーン自身と彼の作品もまた然り。しかし，あるいはそれゆえに，新約・旧約聖書はもちろんのこと，古今の神学者，哲学者・思想家，歴史家そして文学者の著作を渉猟しつつ，ホーソーンの諸作品を反芻するかのように繰り返し読んでご自分の理解・解釈を検証し深めてこられました。その結果，アメリカはもちろん内外の研究者が見落としている点などを指摘して，代表作『緋文字』を初めとするホーソーン作品を鋭く独創的に分析する論文を数多く書かれています。敬服の一言以外にありません。アメリカ・ルネッサンスの作家たちに関する研究の現状についてさほど詳しくない筆

者が言えることかどうか自信はありませんが，青山先生ほど，広く深いキリスト教神学・哲学の理解に達し，その理解に裏打ちされたホーソーン作品解釈を一貫して提示してきた研究者は，少なくとも本邦ではまだ他にいないのではないでしょうか。また，ホーソーンの同時代人（特にエマーソンとメルヴィル）の作品・著作に論及するご論文もあり，それらも上述の深いキリスト教理解に基づいていて，ホーソーンとの相違点や類似点を指摘しつつ論述されているので，当該作家の特徴を際立たせるとともにアメリカ・ルネッサンスの多様性をも際立たせることに成功なさっています。

最後に青山先生のお人柄などについてあと一言二言。誠実さと飾り気のなさは学科の誰もが認めるところですが，同時に先生は照れ屋でもいらっしゃいます。冒頭にも述べたように，大学時代の後輩ということもあり筆者と話しているときはそういう面をお見せになることはありませんが，その他の方々と接しているときにそれが表れます。学生にもそれはわかるようで，そこが「カワイイ」のだそうです。加えて，これはご自身のお言葉ですが，先生は「寂しがり屋」でもあります。そして面倒見がよい。先生は20年以上前に「岡本アメリカ研究会（OAK）」を立ち上げ，主宰者となって定例の研究発表会を実施し機関誌を発行していらっしゃいます。ご自身も発表し寄稿もなさいますが，研究会立ち上げの趣旨は主として大学院出身の若手・中堅研究者に発表の機会を提供することでした。このことは先生の研究内容に触れた項で取り上げるべき事柄で，お叱りを受けそうなのですが，筆者はこの研究会の集まりを「寂しがり屋」と「面倒見のよさ」がつながった形と見ています。その見方の当否はともかく，現実に先生の指導を受け，発表の場を与えられ，業績を積み重ねている人たちが相当数います。先生を慕って頻繁に青山研究室に顔を出す人たちがいるのも頷けるところです。4月にはその研究室がなくなることは彼らにとって寂しい限りでしょう。それはもちろん同僚教員も同様です。言葉の使い方に厳しい先生が「そんな日本語はない！」とおっしゃることを覚悟のうえで言えば，10号館8階が＜青山ロス＞から抜け出すのにはしばらく時間がかかりそうです。

ご退職後も青山先生の旺盛な研究意欲が衰えることはないと確信しています。後進の指導に対する熱意についても同様です。ご健康には十分留意され，今後も一層ご活躍ください。長い間本当にありがとうございました。